

## 南側斜面と谷底の調査成果

— 2区の縄文時代遺構を中心として —

主催：(公財)かながわ考古学財団

共催：伊勢原市教育委員会

### 上粕屋扇状地の台地と谷の形成

上粕屋扇状地は、大山を水源とする鈴川によって約6万年前に形成された台地で、神成松遺跡では、縄文時代以降に堆積した黒土層の下に立川ロームと武蔵野ロームが約16mの厚さで堆積しています。この台地は、南北約3km、東西1.5kmの広がりを持ち、東西に流れる二三の小河川によって南北に分断されています。調査地点南側2区の谷もその一つで、谷底の発掘調査によって、約4万年前に武蔵野ロームを削って川が流れた流路跡（立川礫層）とその上に立川ロームが堆積した立川段丘が確認されました。今回の調査地点3区と2区上段は武蔵野段丘に相当し、それより数m低い中段が立川段丘に相当します。この谷は、上流の北西に遡ると上粕屋子易遺跡付近まで続き、鈴川の旧流路をもとに川が流れて形成されたと推定されます。



上粕屋扇状地と調査地点の位置



縄文時代～古墳時代の流路跡全景

### 2区の調査

2区は、現在の調査地点（3区）の南側に位置し、上段（2区A）の台地面が谷に向かって緩やかに傾斜しており、立川段丘に相当する中段（2区B）を経て下段・谷部（2区C）となります。3区と2区各地点の比高差は、上段で3～5m、中段で約7m、下段・谷部で約11mを測ります。2区の調査は、2015年7月1日から2017年7月31日まで実施しました。

### 南側斜面の遺構

上段の緩斜面からは、中期末から後期前葉の敷石住居跡が3軒点在して発見され、貯蔵穴の可能性のある土坑や屋外の埋設土器なども発見されています。敷石住居跡のうち2軒は、壁際に縁石を配置しただけ、あるいは中央の敷石を除去した状態で発見されています。また、中段の平坦面は狭小なこともあり、縄文時代の遺構は発見されておきませんが、下段に移行する斜面から埋設谷が確認されました。そして、埋設谷の中央からは南側の谷に下りる通路と思われる階段状遺構が発見され、その両脇の斜面には2軒の住居跡が構築されていました。東側の住居跡は出土遺物がなく時期は判明しませんが、西側の住居跡は後期前葉の敷石住居跡であり、ともに近世の段切り造成（下段）により奥壁部分を残して壊されています。さらに、斜面下の谷部からも後期初頭の敷石住居跡が1軒発見され、住居跡の下層から中段下の階段状遺構に続くと思われる溝状の遺構が発見されました。この遺構は、台地上から谷底に下りる通路と推定され、出土土器から中期後葉に作られたと考えられます。このように、神成松遺跡では、台地上と南側斜面に住居を作り、川が流れる谷底を含め広範囲に活動を行っておりました。



上段から発見された敷石住居跡（J2住、後期前葉）



屋外の埋設土器（J1埋壺、後期前葉）



中段下斜面の通路跡（J1階段状遺構）



階段状遺構西側の敷石住居跡の掘り方（J1住）



斜面下の敷石住居跡 (H28-J 1 住、後期初頭)



左の敷石住居跡の掘り方 (建替えの痕跡がある)



上の敷石住居跡の土器出土状態と復元土器 (神奈川県教育委員会提供)



斜面下の溝状の通路跡

### 谷底の流路跡

谷部では、地表から約5mの深さで縄文時代の流路跡が発見され、調査区の断面では幅10mほどの砂礫層がみとめられました。この流路は古墳時代まで変わらず、縄文時代と同じ場所を川が流れていたことが確認されました。このため縄文時代の遺構の大半は、弥生～古墳時代の川により壊されて失われたと思われます。また、渇水期には川は流路の中の狭い水路を流れており、縄文時代の水路の一部は台地から滑り落ちた立川ロームにより覆われていました。



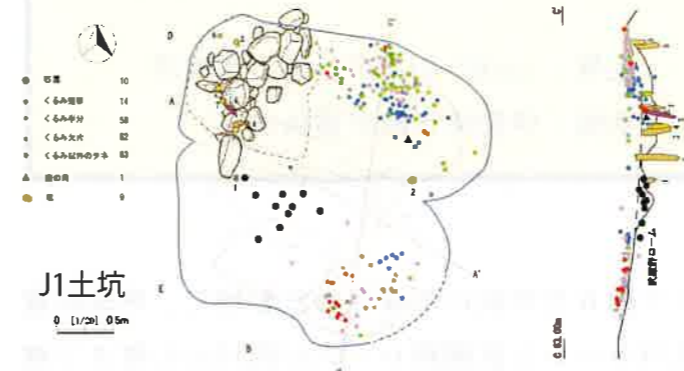
縄文時代～古墳時代の流路跡 (武蔵野ロームの上に1m以上の砂礫層が堆積している)



立川ロームに覆われた縄文時代の水路跡 (水路跡の砂礫層からは縄文土器が多量に出土した)

### 谷底の縄文時代遺構

谷底の縄文時代遺構としては、唯一土坑 (J 1 号土坑) が発見されました。この土坑は、楕円形を呈する浅い土坑が長軸方向を川の流れに合わせて2基並んでおり、ともにクルミを中心とした種実が多く出土しています。北側の土坑では、川の上流側に立石を伴う配石がみられ、配石の下部を中心に8本の杭が地山の武蔵野ロームに打ち込まれていました。これらの杭は、おそらく流水を避けるための木材などを押さえたものと考えられます。



J1土坑



J1土坑

### 谷の埋積と土地利用の変遷

発見された遺構などから谷底の土地利用の変遷をみると、弥生時代と古墳時代では、縄文時代と同じ流路を川が流れ、このうち弥生時代では、農具等の原木と考えられるイチイガシの割材を水中で保管した木組み遺構が発見されました。また古代では、谷の埋積が進んで流路が狭くなり、明確な遺構は発見されませんが、流路から数点の完形土器 (土師器坏) がまとまって出土しました。その後、時代が下って中世になると、谷の両側に水路を掘って流水を管理し、水田耕作が行われました。しかし中世後半以降には、さらに谷の埋積と乾燥化が進んで日常的に水が流れる川がなくなったため、畑として利用されるようになり、現代に至っております。



中世の水田跡 (傾斜地のため棚田状を呈する)



近世の畑跡 (宝永火山灰で覆われた畝状遺構)